
. 運命による交響曲 .

月遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・運命による交響曲

【Zマーク】

Z2104D

【作者名】

月遼

【あらすじ】

ちょっと?デジック娘のクノンとその幼なじみのシオンの旅物語の始まりです。

(前書き)

短編が苦手なので、変な所は「」で承ります。

旅の始まり

鬱蒼とした木々の葉などの間から見える夜空に輝いているのは幾千もの星。輝かしい星達とは裏腹に今、その下で数人の盗賊に追われて死に直面している一人の少女がいた。

「…………はあ…………はあ…………」

走り過ぎて炎症を起こして熱く焼けそつた喉からの荒い呼吸は苦しげに繰り返されて。

棒になつたような脚が悲鳴を上げるように痛む。

あれからどのくらい走つただろうか…………。気にはなるが、今はそんな事を考える気にはならない。いや、考える暇がない…………。

もう今は盗賊達から逃げるのが最前線で。

「待てえええっ！！」

背後からの罵声に身体を震わせるも少女は必死で走つて。しかし滔々、追い込まれてしまつた。後ろに後退れば…………。そこはとても深く高い…………崖。

「…………」

少女は蒼白の顔で崖を見て…………。これで、終わり…………。そう思うと涙が溢れて…………。

盗賊達にどうこうされるのなら、死んだ方が増し…………。

少女は瞳を閉じて、崖から落ちる準備をした…………。

「…………」

宙に身体が浮いた時、少女の意識は闇に呑まれ…………。

「…………ん…………？」

確かにあの時、私は崖に落ちた。

意識が飛んでいたせいで、崖に落ちた頃から、意識を取り戻すまでの記憶が無くて。

でも、その間に何かがあったから、私はいつして生きてるのよね……。
でも、どうして……？

あんな所から落ちたら普通……。少女は、ふ、と上を向いた。
とても深くて……とても高い……」こんな崖から落ちて死なない訳がない。

と、少女が周りをキヨロキヨロ見渡していると……。

「……やっと起きたか」

そこにハスキーなハイトーンボイスの声がして。

ふ、と声がした方向に田を向けると、そこにはとても美しい少年のエルフの姿があった。

「……大丈夫か？」

氣をつかうエルフの少年に少女はしどろもどろしながら、答えた。

「……は、い……」

この少年が助けてくれたのだろうか……。

「……あ、あの……」

「いきなり、崖から落ちて来て……危なかつたんだからな」

少年は前髪を搔き上げて、大きな溜息を深々と吐いた。

と、少女はその少年の仕草を見て何故かその少年を懐かしく感じた。小さい頃、お家の事情で何処か遠い所に引越ししてしまった、幼なじみ。その子と似ている……。淡い月光のよつな、金の髪。とても綺麗な宝石の様な、エメラルドブルーの瞳……。

本当にそつくりで……。

「つて、まさか……！」

「……もしかして……シオン……？」「……ああ」

シオンは少し不機嫌そうに言葉を返した。勿論、不機嫌なのは少女のせいなのだが……。何故ってそれは……。

「……全然、変わつてないんだな、クノン。どうせ……余計な事に首突つ込んで、また盗賊に追い回されたんだろ」

見透かした様にシオンは呟く。

勿論、シオンの言った事は、当たつていた……。

首を突つ込んだつもりはなかつたんだけどなあ……。

そんな、しょんぼりしているクノンをみて、シオンは苦笑した。突然、笑い出したシオンをクノンは口をぽかーんと開け見つめる。

「…………へ？」

「…………ククッ……。そうだ、お前に言つ事があつた。叔母さん達は？」

「…………へ？」

クノンは質問の意図が分からず、首を傾げた。

お母さんの事……？

お母さんは……。

「…………お母さんは、10年前に他界しちゃつた。お父さんはその時に私を置いてつて何処かに行つて……だから、一人暮らし」

そう。私には家族がいない。ずっと、10年前から一人ぼつちだつた。そう、ずっと。

「…………そつか……」

シオンは突然、知らされた事実に残念そうに呟いた。どこと無く、悲しい表情のクノン。しかし、彼女は直ぐに、笑顔を取り戻す。

「だからつて言つたつて、悲しみに浸つてゐ暇がないんだけどね」曇りのない、太陽のような笑顔と、真つ直ぐ前を、見る瞳。それを見ると自然にシオンも笑顔が零れて。「…………お前らしいな。で、頼みたい事がある」

「…………なあに？」

「…………だから

「…………いたぞ！……あそこだつ！！！」

シオンの声は、大きな罵声に搔き消された。

反射的に後ろを振り返るシオンとクノン。振り返つた先には、先程、クノンを追い回していた盜賊達。

それを見た、クノンは深く溜息を吐いて。

「…………また？有り得ないわよお…………はあ…………」

クノンは、途方に暮れた表情で、肩を落としシオンを見上げた。

シオンはその視線に気付くと、クノンを背に隠して、腰に掛かつていた、鞘から両刃の剣を引き抜き、構えた。

あつという間に、一人の回りにどんどんと、盗賊が集まつていく。始めは数人だつた盗賊達が、今では数十人という盗賊の数になつていて。

「クノン、動くなよ」

「あ…、うん」

そんな一人を、盗賊達は獲物を狙う虎の様な、顔付きで睨んで。盗賊達は、じわりじわりと間を詰める。

「その女を…寄越せつ…！」

盗賊の一人がシオンに向かつて走り剣を構え、振り下ろす。シオンはそれを、予め構えていた剣で受け流して。

それと同時に、盗賊達は武器を構え、シオンに切り掛かつた。多勢に無勢の筈だが、シオンはそんな事を思わせない剣捌きで、軽く盗賊達を遇つていた。

そして、あつという間に決着は着いて。

盗賊達は全員、地に転がり気を失い、とても、情けない状態でいて。シオンは、そんな盗賊達の姿を見て笑いを殺しながら、キイン、と金属音を鳴らし、剣を鞘に戻した。

「…………ふう…………」

クノンは緊迫感から解放され、ぺたん、と地に座り、安堵の声を上げた。

「…よかつた…。ありがとね、シオン」

シオンは突然、自分に向けられた言葉に目を見張るも、直ぐにクノンの微笑みを見て、その目は細められた。

幻想的な月明かりの下、爽やかな風が吹いて…。

二人の再会を祝福するように…。

……」の出会いはきっと運命だったから……

(後書き)

こんな感じです。続編を書いて欲しい方は評価欄に書いて下さいま
し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2104d/>

. 運命による交響曲 .

2010年10月21日21時30分発行